教育実践報告

授業外学習時間の確保とその効果に関する一考察

金子　能呼

A Study on the Outside the Classroom learning time

KANEKO Noko

要　　旨

担当科目である「マーケティングの基礎」について、学生の授業外学習時間を把握するため、アンケート調査を実施した。

その結果、授業外学習時間は、週に2時間（最長では8時間）以上確保している学生が多いことがわかった。学習時間が一定以上確保されているのは、出欠を兼ねる「出席レポート」の作成に起因すると考えられる。アンケートから、多くの学生がレポートを負担に感じていることも明らかになった。

とはいえ、学習時間が長い学生ほど、成績が良いだけでなく、受講に対する満足度が高いことも確認された。学生は負荷に耐えることで、知識はもちろんのこと、達成感や充実感も得ることができ、学修効果が大きくなると推察される。

キーワード

授業外学習時間　　学習効果　　出席レポート

目　　次

Ⅰ．はじめに

Ⅱ．授業外学習時間の実態調査結果

Ⅲ．授業外学習時間の確保と「出席レポート」

Ⅳ．授業外学習時間の確保とその効果

Ⅴ．むすび

注

文献

Ⅰ. はじめに

学生が授業のほかに確保している学習時間については、教育改善推進委員会主導で学期ごとに実施する「授業についての学生アンケート」（以下、「学生アンケート」と呼ぶ）から、科目ごとの平均値、および時間区分別の学生数とそのシェアを把握することができる。

担当する「マーケティングの基礎」は選択必修科目であり、出欠を兼ねる「出席レポート」を課している。レポートの提出頻度や完成度、学生から寄せられるコメントなどにより、レポート作成など授業外学習に費やす時間の個人差は、決して小さくはないことが推察される。

この個人差を明確化するために、「学生アンケート」とは別に、科目特性を踏まえたアンケート票を作成し、受講学生に対して学習時間に関する調査を実施することとした。本調査では、授業外学習時間について現状を把握するとともに、成績や受講の満足との相関について分析を加えることを課題とする。

Ⅱ. 授業外学習時間の実態調査結果

1. アンケート調査の実施方法

アンケート調査は、2016年度前期の授業期間中である2016年6月6日（月）に行った。「マーケティングの基礎」を受講する全学生（商学科121名、経営情報学科113名）を対象とし、アンケートは商学科が3限、経営情報学科は2限の授業時間中に実施した。

参考資料に掲げた通り、アンケートは2問のみとし、授業の大きな妨げや学生の負担にならないよう配慮した。回答数は商学科が113（回答率93.4%）、経営情報学科は106（同93.8%）であり、当日の欠席者（商学科8名、経営情報学科7名）を除くすべての学生から回答を得ることができた。

2. 授業時間外の学習時間

「学生アンケート」では、授業時間外の学習時間について、「この授業のために、授業時間以外に毎週平均的にどれくらいの学習時間（予習・復習・レポート・実習・試験勉強など）を持ちましたか」（設問5）と質問し、学生は「④1時間以上　③30分以上～1時間未満　②15分～30分未満　①15分未満」の中からひとつ選択する。

2016年度前期に開講した「マーケティングの基礎」の「学生アンケート」集計結果を見ると（図1）、両学科とも「④1時間以上」と回答した学生が7割以上を占めていることがわかる。以下、1時間未満と回答した学生については、「③30分以上～1時間未満」、「②15分～30分未満」、「①15分未満」とそれぞれの区分ごとに学生数とシェアを確認することができるものの、最も回答数が多い1時間以上の学生については、実質的な学習時間を把握することができない。

本調査では、「学生アンケート」の結果から、授業外学習時間が1時間以上である学生が圧倒的に

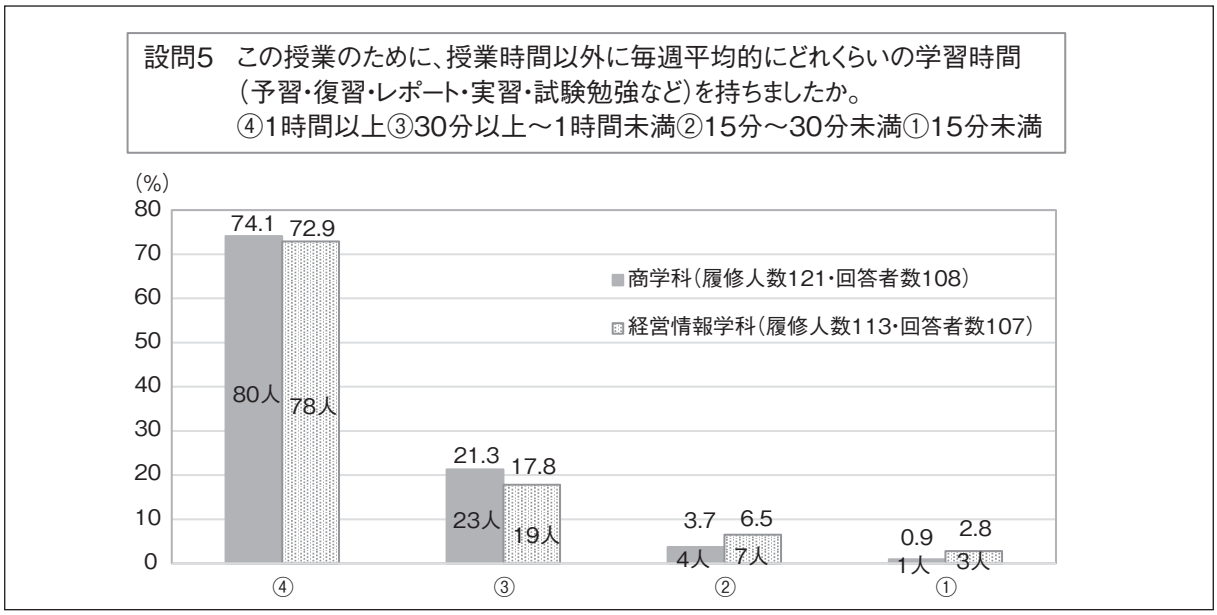

図1. 2016年度前期授業についての学生アンケート集計結果

多数を占めることを鑑みて、回答の選択肢を「①30分以内　②30分～1時間以内　③1～2時間程度　④3時間以上」としたうえ、具体的な時間の記入欄も設けた。また、設問においては「この授業のために、授業時間以外に毎週平均すると、どのくらいの学習時間（予習・復習・ノートの整理・レポートや課題の作成・理解の確認・知識の活用・実践的な取り組みなど）を持ちましたか。」と、科目特性に即した説明を加えた。

本アンケート調査の結果を見ると（図2）、問1の回答で最も多かったのは、両学科とも「③1～2時間程度」であった。次いで「④3時間以上」が3割程度を占めている。1時間以内は少数に留まっており、「②30分～1時間以内」が12％程度、「①30分以内」は商学科0.8％、経営情報学科2.7％に過ぎない。記入された具体的な時間は、商学科が平均2時間40分（最長8時間30分、最短30分）、経営情報学科が平均2時間34分（最長8時間50分、最短20分）であった。

問1の回答別に平均時間を算出すると、商学科は「①30分以内」が30分、「②30分～1時間以内」が1時間4分、「③1～2時間程度」が2時間22分、「④3時間以上」が4時間21分となる。経営情報学科は、「①30分以内」が20分、「②30分～1時間以内」が50分、「③1～2時間程度」が2時間8分、「④3時間以上」が4時間であり、両学科とも学習時間の個人差は大きいことが指摘される。

3. 受講の満足度

問2では、受講の満足度について質問した。表1がその結果であり、商学科では84人（73.3％）、経営情報学科では85人（80.2％）が「①とてもよかった」と回答している。次いで「②よかった」が商学科27人（23.9％）、経営情報学科17人（16.0％）、「③まあまあよかった」が商学科2人（1.8％）、経営情報学科３人（2.8％）であり、これらを合計すると、商学科100％、経営情報学科99.1％となる。

問1の結果から、週に2時間以上の学習時間を確保している学生が多くを占めていることがわかった。最長では8時間以上の学習をする学生もいることから、学生が感じるであろう「負荷」は、小さいとは言い難い。とはいえ、ほとんどの学生が受講したことをよかったと思っていることが、明らかになった。

アンケートの自由記入欄には、「レポートがあるのでちゃんと授業で聞いてメモする力がついているのが実感できる。レポートは大変だけど、授業内容が頭にしっかり入ってくるのでGoodです。」（商学科）、「レポート大変だと思うけど、その分身につくものは大きいと思うし、何より楽しい！！」（商学科）など、「レポートは大変」とのコメントが目立った。学生は「レポートは大変」と負担に感じつつも、レポート作成によって得られる成果を自覚できるからこそ、受講したことを「よかった」と思えるのではないかと想像することができる。

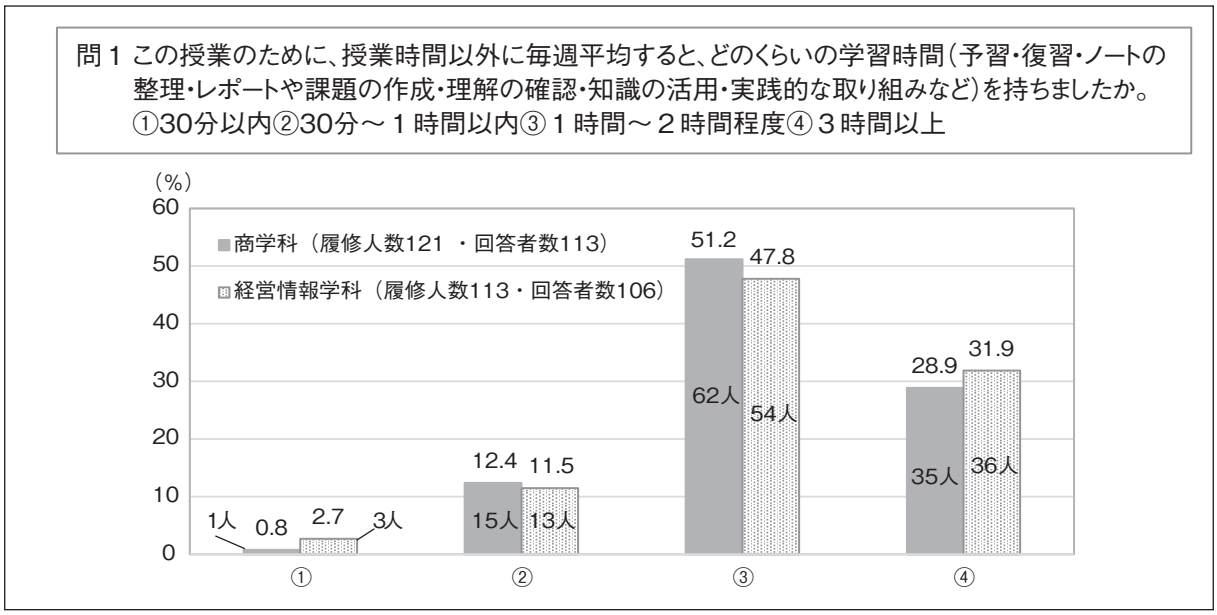

図2.　学習時間に関するアンケート調査結果

Ⅲ. 授業外学習時間の確保と「出席レポート」

1.「出席レポート」とは

学生が大変だと感じているレポートとは、「出席レポート」を指している。「出席レポート」とは、授業のたびに提出させる、出欠を兼ねるレポートである。「出席レポート」は、平成21年度教育GPに選定された『メモ力育成を核とした単位制度実質化の取組』の一部として導入された。

学生は授業中にメモしたノートをもとに作成したレポートを、次週の授業で提出する。提出されたレポートは、教員が添削し、コメントを記載したうえで、翌週の授業において学生に返却する。これを繰り返すことにより、双方向型学習の構築を可能にしている[注1]。

2.「出席レポート」の効果[注2]

「出席レポート」はメモ力の育成を目指す取組である。「マーケティングの基礎」では「出席レポート」の内容を、授業中に取ったメモのまとめとしており、メモをとることの重要性については繰り返し説明をしている。

本科目においては、テキストを用いず、黒板での板書も行わない。パワーポイントで作成したスライドを示し、説明を加えていくため、学生はスライドに提示されたことだけでなく、口述内容もメモをする必要がある。学生によっては授業中に筆記用具を置く暇がないほど、メモをとり続けることになる。とはいえ、メモをたくさんとることが「出席レポート」の作成に役立ち、「出席レポート」の評価を高めることにつながるため、授業の回数を重ねるごとに、学生がとるメモの量が増えていくように感じられる。

なお、「出席レポート」を作成する際には、手書きではなく、パソコンを使用することとし、ワードやエクセルなど必修科目で学ぶ知識と技術の活用を図っている。そして、メモのまとめといっても、メモしたことをそのまま入力するのではなく、整理し直し、必要があれば調べたことを加えたり、自分の意見を記述するなど、復習も兼ねて作成に取り組むよう指示をしている。

テキストを用いていないため、自分で作成した「出席レポート」が、手元に残る資料となる。したがって、学生は見直す際にもわかりやすいよう、自分なりに工夫してレポートをまとめるようになる。さらには、提出相手である教員にとっての読みやすさとわかりやすさ、見た目の魅力、デザイン性なども意識するよう促している。

字数や枚数に制限は設けていないため、1回分の授業についてまとめた「出席レポート」は2、3枚程度から7、8枚程度と、分量には格差が見られる。当然のことながら、授業中にとるメモの量が多い学生ほど、枚数は増える傾向にある。写真1は学生が提出した「出席レポート」の一例であるが、画像の使用や、フォントの大きさや色づかいなどに創意工夫が見られる。

アンケートの自由記入欄には、「最初は黒板を使わないでスクリーンをメモして、先生の話もつけくわえての授業でやってけなそうだと思ってたけど、いざやってみるとたのしくてメモ力もどんどんついていっておもしろいと思えました。」（経営情報学科）、「ずっとメモを取っていて大変だけど、楽しいし、1時間集中して授業を聞いていられる。」（商学科）、「はじめは、話すスピードがはやいなとか、書くこと多くて大変だなと感じていましたが、今では慣れてきて、理解しながら書くことができるようになりました。」（商学科）などの記述があった。授業中、片時もペンを休ませないような勢いでメモをしている学生が、少なからず観察された。授業中に自分で書き取ったメモの重要性を認識するようになると、さらにメモをとろうとする意欲も高まるようである。

さらに、「レポートは大変ですが、やっていると、パソコンもはやく打てるようになってくるし、まとめる力もついてくるので、いいです！」（商学科）など、パソコンの操作技術が向上したことを喜ぶコメントも見出すことができた。また、「レポート、家でできなくて、毎週土曜日に学校きてやってますが、それにより生活習慣もよくなり、集中して課題にも取り組めるようになったので良いことずくしです。」（経

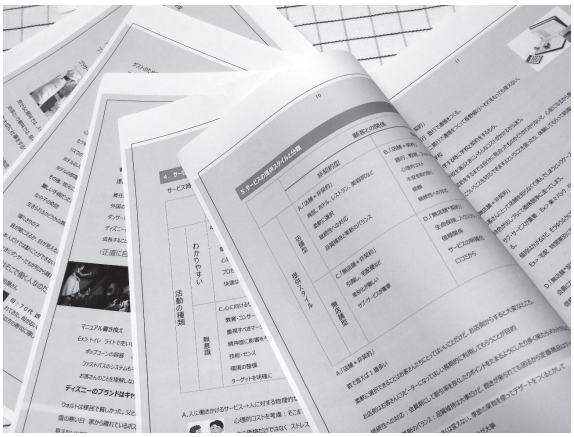

写真1

営情報学科）といった記述もあった。

3. 授業外学習時間の確保

「学生アンケート」の集計結果によると、2016年度前期に開講した「マーケティングの基礎」について、授業外時間に関する設問5（「この授業のために、授業時間以外に毎週平均的にどれくらいの学習時間（予習・復習・レポート・実習・試験勉強など）を持ちましたか」）に対する回答の平均値は、商学科が3.69、経営情報学科が3.61となっており、両学科とも短期大学部の平均値2.52を上回っている。

「出席レポート」を導入する以前、2008年度に開講された授業を対象に実施された「学生アンケート」では、授業外学習時間に関して、「授業時間以外の時間に、予習、復習、あるいは授業内容を発展させるための努力をしましたか」（問6）という設問があり、選択肢は「5：Yes／4：ややYes／3：普通／2：ややNo／1：No」の5つである。

当時、「マーケティングの基礎」は選択科目であり、レポートは3回程度課していた。「学生アンケート」の回答数は86（履修人数103）で、問6の平均値は3.45となっている。この数値は、短期大学部における講義系科目の平均値と一致している。

授業の内容は毎年修正を加えているとはいえ、2008年と2015年で大きな相違は見当たらない。2009年以降、選択科目から選択必修科目に変わり、「出席レポート」を導入したことが、授業外学習時間の増加に直結したことは、疑いを容れない。

Ⅳ. 授業外学習時間の確保とその効果

1. 授業外学習時間と成績

成績は、レポート点（60%）、期末試験（30%）、受講態度（10%）のトータルで評価している。図3には受講学生全員の授業外学習時間と成績の分布を掲げた。これによると、授学習時間が少ない（100分未満）と相対的にC評価が多くなり、学習時間が多い（300分以上）の学生は1名を除き、全員がA評価となっている。授業外学習時間を確保している学生ほど、成績は上位に位置する傾向にある。

授業外学習時間の多くを占めるのは、レポートの作成であろう。授業外学習時間が長くなるほどに、レポートの完成度が高くなりレポート点が上昇するのは当然のことと捉えられる。また、メモを取り、レポートを作成するプロセスにおいて、授業内容の理解や知識の定着も促される。したがって学習時間が長い学生ほど、知識の活用が容易になり、期末試験でも高い点数を獲得しやすくなると考えられる。結果として、成績は上位に位置することとなろう。

2. 授業外学習時間と受講の満足

先述したとおり、本科目の受講学生は「出席レポート」の作成に要する時間を週に2時間以上確保

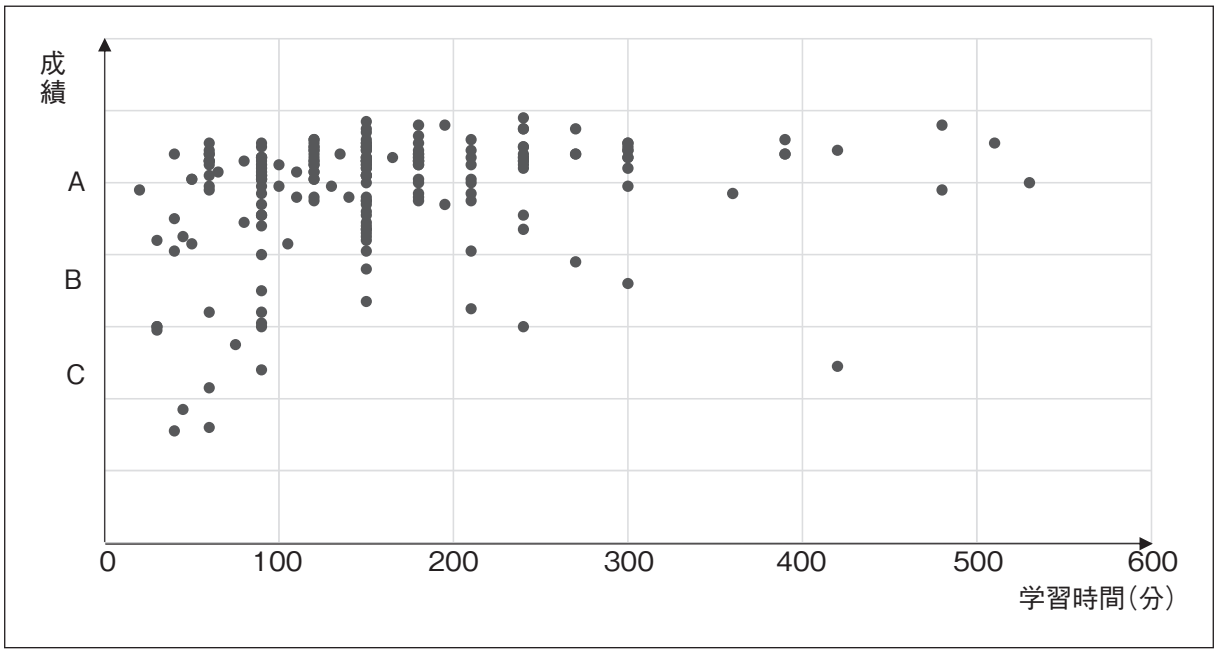

図3. 授業外学習時間と成績

する学生が多くを占め、「レポートは大変」との自覚を持っている。とはいえ、本アンケート調査の問2では、受講したことを「よかった」と思っている学生がほとんどであった。

問2の回答別に、平均学習時間を算出し、示したのが図4である。これによると、受講したことを「①とてもよかった」と思っている学生の学習時間が圧倒的に長く、商学科2時間55分、経営情報学科2時間44分となっている。「②よかった」と答えた学生の学習時間は両学科とも2時間弱、「③まあまあよかった」は商学科が1時間45分、経営情報学科1時間30分と、学習時間の多い学生ほど、科目を受講したことによる満足感が大きい。

自由記入欄には、「マーケティングの基礎だけで、話を聞く、メモを取る、要点をまとめるという学習内容なので、とてもためになります。」（商学科）、「前まで見直しやノートのまとめ直しなどめんどくさくてやらなかったけれど、この授業を受けてから楽しくなってきて、勉強する意欲が出てとてもよかったです。」（経営情報学科）、「メモ力がほんとにすごいつくなと思いました。レポート作成の課題があるので、せっかくやるならいいものをつくりたいなと思うので、まとめる力もつくと思いました。」（経営情報学科）など、メモを取ることに熱心であり、「出席レポート」の作成にも力を入れている学生ほど、学修効果を実感することができ、受講してよかったと感じている。

「出席レポート」は、繰り返し提出させることにより、学生が主体的・能動的に集中して授業に取り組む態度が醸成され、科目の理解を助けるだけでなく、多彩なコンピテンスなども育成されることが期待される。他方で、授業中にメモを取ること、「出席レポート」を作成することに力を入れることができない学生は、「出席レポート」を作成することに対する負担感に耐えられなくなってしまうこともある。

アンケートの問2において、「⑤あまりよくなかった」と答えた学生は、自由記入欄に「レポートがあることを知らなかったから」と記していた。レポートが苦痛になると、「出席レポート」の提出も滞りがちになり、「出席レポート」の作成により得られる成果も乏しくなる。意欲が消失してしまうと、欠席回数が増え、ついには欠席超過に陥る可能性も否定できない。「出席レポート」の負荷に耐えられない学生への対応策を講ずることは、継続的な課題である。

V. むすび

「出席レポート」はコミュニケーションツールともなり得る。履修人数が一定以上の講義であっても、「出席レポート」のやりとりを通じて、学生一人ひとりと向き合うことができるのである。先に述べた、「出席レポート」の負荷に耐えがたい学生への対応策として、授業内容を工夫し、学習意欲を高めることができるよう努めることはもちろんであるが、個別に声がけをしたり、相談にのるなど、丁寧なコミュニケーションが求められる。

同時に、「出席レポート」の負荷に耐えるよう励ますために、「出席レポート」を活用することもできる。アンケートの自由記入欄には、「レポートは毎週大変でしたが、コメントのところで先生と会話ができて楽しかったです。」（商学科）、「レポートは大変だったけど、コメントとか評価がうれしくて頑張れました！」（商学科）、「レポート大変で死にそうでしたが、先生の細かな感想が次につなぐ励みに

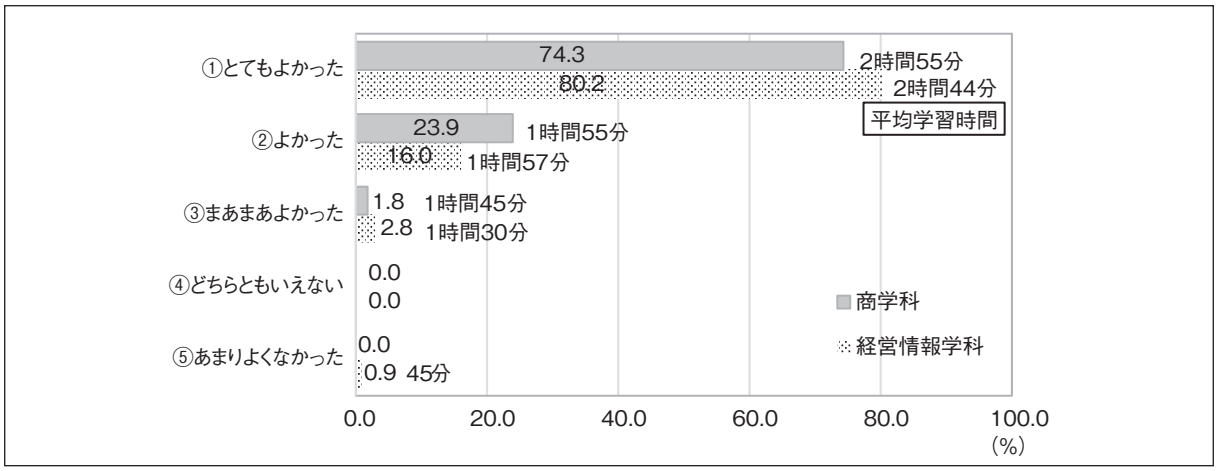

図4. 学習時間と受講の満足

なりました。」（経営情報学科）など、「出席レポート」を通じたコミュニケーションの重要性が浮き彫りになるような感想が散見された。

学生は「出席レポート」に質問や感想なども記入するため、教員は無機質に添削するのではなく、個別に解説や説明を加えたり、アドバイスや励ましの言葉を返すこともできる。そのためにも、まずはどのようなかたちであっても「出席レポート」を提出させるよう尽力しなければならない。

授業期間の最後には、「学生アンケート」とは別に、自由記入欄を設けた「最終アンケート」を実施している。そこには、「レポート最初はすごい大変でしたが、だんだん慣れてやりきることができてよかったです。」（商学科）、「レポートをつくるのが始めの頃大変でしたが、作っていくうちに力がついていることを実感することができました。メモを取る力もかなりつきました。作ったレポートを後々見直すことも楽しいです。」（商学科）、「レポートも慣れたら作るのが楽しくなってて、終わっちゃって寂しいです。」（商学科）、「最初はレポートなんて作れないと思っていたけれど、回数を重ねていくうちにどんどん楽しくなりました。」（経営情報学科）、「だんだんレポートも慣れてきて作るのが楽しかったです。うまくできると次も作るのが楽しみになって、わくわくでした。」（経営情報学科）などといったコメントが寄せられ、学生自身ががんばることで自分の力を鍛え、学ぶ楽しみを味わうことができたことが窺えた。学生が主体的・能動的に取り組むことができるようになれば、学修効果は増大していく。そこに到るまでの過程においては、学生を注視し、支援を怠らないよう努めることが、教員の役割として重視されよう。

注

注1　「出席レポート」については、経済教育学会第26回全国大会（2010年）において報告し、同学会誌『経済教育』などで報告内容を発表している[1)]。メモを取った内容を毎回授業後に提出させる「出席レポート」は、採点だけでなくコメントを記し次週学生に返却する。これを繰り返す取り組みでは、添削や返却に時間がかかるなど課題も指摘されるが、「労働力の質」の観点から求められる汎用的能力育成を促す授業展開を可能にしていることが確認された。

なお、「出席レポート」の取り組みは、選択必修科目において実施されている。科目によって授業の内容はもちろん、「出席レポート」の指示も異なるため、学生が得られる効果にも相違が見られることを、アンケート調査によって明らかにした[2)]。

注2　「出席レポート」の効果については、経済教育学会第27回全国大会（2011年）および、第29回全国大会（2013年）において報告し、同学会誌『経済教育』などで報告内容を発表している。

毎週授業のたびに提出させる「出席レポート」の取り組みは、学生と教員のコミュニケーションツールとしても活用されており、学生一人ひとりの学習サポートを可能にしている。「出席レポート」の効果について学生に対するアンケート調査を実施したところ、メモやレポートの作成に力を入れている学生ほど、成果を得られていると実感している傾向が読み取れた[3)]。

「出席レポート」の取り組みでは、担当教員がそれぞれにおいて異なるコンピテンスを育成しようと試みている。学生が得られていると実感しているコンピテンスも科目別に異なることが、アンケート調査により明らかになった。このことから、複数科目を受講することにより幅広いコンピテンスを育むことが可能になるといえる[4)]。

文献

1) 金子能呼, 飯塚徹, 糸井重夫.「出席レポート」を活用した「就業力」と「学士力」向上への取り組み. 経済教育No30, 147-154 (2011)

2) 金子能呼.「出席レポート」に関するアンケート調査結果. 松本大学研究紀要第12号, 125-133 (2014)

3) 金子能呼.「出席レポート」の効果に関する一考察. 経済教育No31, 48-53(2012)

4) 金子能呼.「出席レポート」を活用したコンピテンスの育成. 経済教育No33, 92-97 (2014)

学習時間に関するアンケート

2016年 ___月___日

科目名 _____

学籍番号 _____　名前 _____

問1 この授業のために，授業時間以外に毎週平均すると，どのくらいの学習時間（予習・復習・ノートの整理・レポートや課題の作成・理解の確認・知識の活用・実践的な取り組みなど）を持ちましたか。①～④より，ひとつ選んで下さい。

① 30分以内　② 30分～1時間程度　③ 1～2時間程度　④ 3時間以上

具体的には _____時間 _____分 程度

問2 この科目を受講してよかったと思いますか。①～⑦より，ひとつ選んで下さい。

① とてもよかった　② よかった　③ まあまあよかった　④ どちらともいえない

⑤ あまりよくなかった　⑥ よくなかった　⑦ 後悔している

その理由

ご協力ありがとうございました。

図5. アンケート調査票